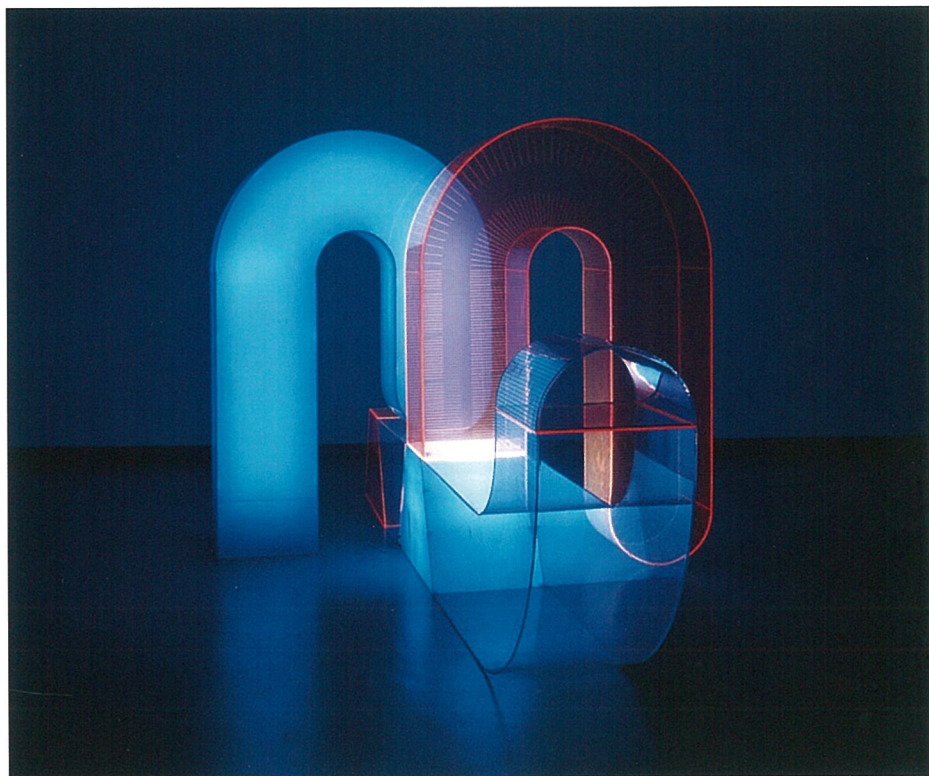


藝術文化雜誌

紫明



特集「鬼」
第四十七號

特集「鬼」	
日本人にとって鬼とはなにか	小松和彦 …… 2
鬼瓦に受け継がれるもの	清水昭博 …… 6
天井裏に潜む鬼	二本松康宏 …… 12
鬼神に横道なきものを	中嶋謙昌 …… 18
人形浄瑠璃の鬼と変化	西瀬英紀 …… 23
鬼の祈り — 鬼剣舞が継承するもの —	相原彩子 …… 27
大津絵〈鬼の念仏〉寸考	クリストフ・マルケ …… 33
詩	
千家元鷹「雁」(『自分は見た』所収)	…………… 42
リレー連載	
アーツ・アンド・クラフツ運動と民藝運動 第七回	
柳宗悦のラスキン、モリス批判	松井健 …… 44
人と作品	
杉全直	
平面から立体へ 空間を往還する“理系、的アプローチ	高浜利也 …… 51
美の随想	
工芸とオートマティスム	福本繁樹 …… 60
連載	
兵庫の画家たち 7	
小林礫川	木村重圭 …… 66
幽玄へのいぎない 三十	
《山姥》問狂言の比較から考える山姥の要素	飯塚恵理人 …… 73
表紙作品解説	
山口勝弘《作品》	山崎均 …… 79
楽劇の窓	
オペラと歌舞伎 — 反復芸術の意味するもの —	藤井康生 …… 80
音楽深遠	
コロナ禍の中で ~音楽をめぐる二、三のこと~	小味淵彦之 …… 84
「博物館・美術館」新時代④	
豊田市のミュージアム・豊田市民芸館の可能性について	児玉文彦 …… 88
紫明の藝術書紹介	奥平俊六・山下裕二・八木橋伸浩・玉村恭 …… 90

表紙 『紫明』題字 西山松之助 表紙作品 山口勝弘
 口絵 狂言面 小椋武悪 赤鶴吉成作 口絵裏解説 中西薫
 篠山能楽資料館蔵

狂言面 小椋武悪

赤鶴吉成作 篠山能楽資料館蔵

室町時代前期 丈一八・九cm、幅一五・八cm、厚さ七・四cm

中西薫

現存する狂言面「武悪」の中で最も古く、歴史的にも貴重な面であり、狂言を愛好する旧家より当館が譲り受けたものである。作者の赤鶴は越前の人。号を「透斎（二刀斎）、名を吉成」といい、南北朝〜室町時代の名工「十作」の一人に数えられ、特に「瘧（み）見」など鬼面を得意とし、激しく動きを感じる能面を残した。「武悪」は狂言「清水」首引「節分」「八尾」などの鬼や閻魔の役につける面である。若荷のように垂れた眼や大きく四角い歯並びなどが特徴である。この面はまだ様式化されていないもので、彩色は白式翁のような仕上げで、より人間味を感じさせてくれる。下地には小豆色の彩色が施されており、さらに上彩色が加えられている。その剥落の痕跡をよく眺めると、ところどころ桜を散らせたような斑文がある。それが「小椋武悪」と呼ばれ伝えられた由縁であろう。面裏には朱漆書で、「武悪 此不阿く赤鶴造 秘蔵所持申候処 御望〇乍入申候者也 宝生将監 重友(花押) 大倉長大夫殿」とあり、「宝生家旧蔵 武悪 赤鶴」の貼紙もある。江戸時代前期に存在した大蔵(大倉)長大夫家に、宝生流八代将監重友(一六一九—一六八五)が秘蔵の武悪を贈った旨がわかる。

現代を代表する能面師岩崎久人氏が『狂言面』(淡交社、平成十六年刊)の中で「あえて能面と狂言面との違いをあげれば、私の場合、能面の制作時には神懸るぐらいに神経を張り詰めますが、狂言面ではそこまでには至りません。逆に、狂言面を神経質に作ると面白さがなくなってしまう。精巧な狂言面は能面に近づいてしまつて、狂言面らしさが薄れてしまうのです。何気なくぎつくりと素朴に作る事が大切なのです。これが狂言面の最も難しいところだと思ひます。」と述べている。時代は違えど面作者の思いは変わらぬことであろう。中世の赤鶴もまた、同じような考えを持ち、この面を打つたのではないかと推測する。あわせてここで、武悪面が多く描かれる当館蔵「狂言面」首引(表紙裏、白黒図版)を紹介したい。狂言「首引」は鎮西八郎(朝)の鬼退治の伝説から考案された作品である。鎮西が播磨国印南野を通りかかったとき、大鬼が自分の娘の食い初めの餌にしようとしたが、鎮西は姫鬼と勝負をして負けたら食われる約束をする。腕押し、脛押しをするが、全て鎮西の勝ち。最後の首引きで鬼どもは姫の加勢をするが、鎮西は隙を見て綱を外し、鬼ども一同が倒れる間に逃げてしまふ、という内容である。シテの武悪面や他の登場人物の表情など、個性豊かに描かれ、狂言の笑いや滑稽味が存分に表れている。装束着付や演式なども江戸時代の中頃以降には現行の型がつけられていくことが、この作品からもわかる。筆者は不詳であるが、近世の狂言舞台の情景を今日に伝える貴重な資料と考えている。(なかにしかおる・篠山能楽資料館館長)

江戸初期から、東海道を行き交う旅人や巡礼者ら（挿図1）大衆を相手に売られていた大津絵は、一二〇以上数えられる画題の中で、〈鬼の念仏〉をはじめとして、〈鬼の廻国〉〈雷と太鼓〉〈鬼の三味線〉〈鬼（雷）の行水〉〈鬼と鼠と柊〉〈鬼は外〉〈福は外〉〈雷と奴〉〈頼光〉〈鬼と餓鬼の首引〉〈槍持鬼奴〉など、鬼が登場する絵がとりわけ多く、鬼の凶柄の人氣ぶりが窺える。拙著『大津絵——民衆的諷刺の世界』（角川ソフィア文庫、二〇一六年）にて、その代表的な画題を紹介しているが、大津絵の鬼は、仏教で説く六道地獄の獄卒というよりもむしろ、『北野天神縁起絵巻』に見られるような、鬼の姿をとった雷神に近いものである。

しかし、節分の鬼退散を戯画化した〈鬼は外〉〈鬼と鼠

参考引用文献

- 門屋光昭著『わが鬼剣舞の里—鬼剣舞と北国農民の祈り—』（トリョーコム発行 一九八二）
門屋光昭編『岩崎剣舞』（和賀町教育委員会発行 一九八五）
北上市立鬼の館編『大鬼剣舞展』（北上市立鬼の館発行 一九九九）
滑田鬼剣舞発創百周年記念誌編集部編『滑田鬼剣舞』（滑田鬼剣舞発創百周年記念事業実行委員会発行 一九九七）
二子鬼剣舞保存会著『二子鬼剣舞三十年間の綴り』（二子鬼剣舞発行 一九八五）
『北上民俗芸能総覧』（北上市教育委員会発行 一九九八）
門屋光昭『享保十七年（念佛剣舞傳全）について』（『いわて文化財第五五号』（社団法人岩手県文化財愛護協会発行 一九八〇）

大津絵〈鬼の念仏〉寸考

クリストフ・マルケ

と柊）や、大江山の酒吞童子伝説に題材を求めた〈頼光〉は別として、大津絵の鬼の画題は、既存の伝説や物語に基づくものではなく、そのほとんどは、大津絵師の創案によって生まれたキャラクターであろう。

本来、鬼は地獄絵などに出ているような、亡者を責める冥界の恐ろしい存在だが、大津絵に現れる鬼の風貌は、剽軽で愛らしく、怪力もなさそうである。とりわけ〈鬼の念仏〉は、時代が下がるにつれ、醜悪な鬼から、人間臭い滑稽なキャラクターになっていく。なぜなら大津絵は、絵解きに使われる、苦しい死後の世界を想像させる地獄絵図と違い、下界の人間の行動を諷刺する戯画であり、魔除けの役割も果たしていたからである。また、そもそも道中の旅土産という性質上、人目を引き、よく売



挿図3 大津絵『鬼の念仏』
18世紀前半 58.2×22.4cm
山村耕花旧蔵（天津市歴史博物館蔵）

き続けられた代表的な画題であり、文政頃に流行した大津絵節に唄われる「大津絵十種」のナンバーワンであった。大津絵店の看板になるほど、大津絵のシンボリックな存在でもあった（挿図4）。現存する作例数から考えても、〈鬼の念仏〉は、大津絵の中で圧倒的に需要が多い図柄であったに違いない。

〈鬼の念仏〉は、元禄末・宝永年間に、既に多くの文献資料や文学作品に取り上げられており、藤娘、槍持

奴、瓢箪鯨と共に、定番の画題であった。当時は、〈鬼に衣させたやう〉（大津 追和氣 宝永六年（一七〇九））、〈衣をきたる鬼の絵〉（大津絵之贊 宝永七年（一七一〇））など、「鬼に衣」という名称で呼ばれることが多かった。この名称からも分かるように、勧進僧、あるいは法衣を着して、鉦を鳴らし金銭や米を強引に請う所謂「念仏申」の見立てであり、そもそも破戒僧を諷刺したものと考えられる。その頃、「大津絵の鬼にも似たる墨衣」（鉦

れる愉快な画題でなければならなかった。江戸中期の俳人・横井也有が言うように、この時代の鬼は、もはや庶民の恐怖の対象ではなくなり、「たゞ棟瓦に傍をのこし大津絵にわらはれて」いたようである（『鶉衣』「鬼伝」天明七年（一七八七））。

〈鬼の念仏〉の形相は、絵師・吃の又平の伝説を仕組んだ近松の名作浄瑠璃『けいせい反魂香』（宝永五年（一七〇八））の中で、「姿は沙門、頭は鬼神、鬼の念仏噛み砕く、牙をならし、角を振り、向ふ者の真向、撞木

をもつて叩き鉦」と、記されている。フランス国立図書館が所蔵しているこの浄瑠璃本には、「おにころもきて悪人をおつかくる」場面が描かれており、年代が特定できる〈鬼の念仏〉の最古の表象となっている（挿図2）。この浄瑠璃が後に歌舞伎に翻案されたのも、〈鬼の念仏〉が流布した原因のひとつであろう。時代によって、鬼の面貌や足指の本数など、容姿が微妙に変容していくが、この鬼の基本的な表象は、明治まで大津絵に継承されている。（鬼の念仏）（挿図3）は、江戸前期末から描



挿図1 英一蝶「巡礼見大津絵」
宝永6年～享保9年（1709～24）頃、
窪俊満『画鶴』天明3年（1783）に模刻
（国立国会図書館蔵）



挿図2 『けいせい反魂香』宝永5年（1708）
大坂 山本九兵衛板（フランス国立図書館蔵）



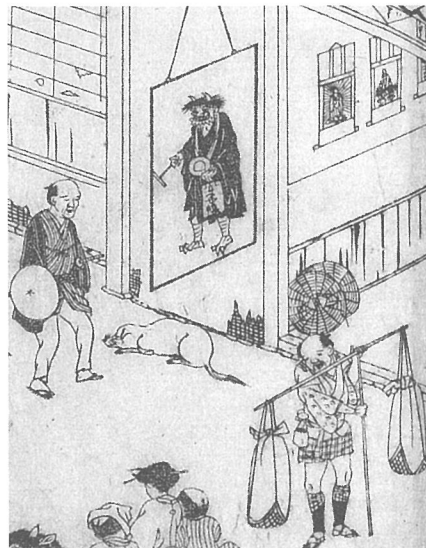
挿図5 〈鬼の廻国〉『大津 追和氣』
宝永6年(1709)(早稲田大学図書館蔵)



挿図6 『木造鬼の廻国(鬼の念仏)立像』
18世紀後半頃 高34cm(フランス国立ギメ
東洋美術館附属デヌリー美術館蔵)

にある「屠家ノ念経」と同様に、「似合ぬ事」を例える俗諺であると、『瓦礫雑考』(文化一五年(一八一八))で解釈されている。一八世紀後半に、大津絵に添えられる教訓的な道歌も、同じような意味を指している。典型的なのは、「慈悲もなく情もなふて念仏を」となる人の姿とやせん」や、「誠なき姿ばかりは墨染の 心の鬼があらわれにけり」などである。つまり、無頼の僧侶を諷刺する絵から、人間の無慈悲、不誠実を戒める絵に変わっていったようだ。その証拠として、珍しい資料を紹介

しよう。
二年前に大津市歴史博物館の学芸員・横谷賢一郎氏と鳥取民藝美術館が所蔵している大津絵を調査した折、〈鬼の念仏〉の掛軸に次のような興味深い紙背墨書を見付けた。
「我祖父嘗て大津を過ぎし時、追分にて買ひ求めし夜に(又の誤記か)念佛の図。無名無印なれ共、所謂浮世又平久吉の真筆是なり。因に諷意を記す。
寧不装身心裏 正直偏所望矣。」



挿図4 大津・追分の大津絵店『東海道名所
図会』寛政9年(1797)(大津市歴史博物館蔵)

龍賦」宝永二年(一七〇五)という、托鉢僧から逆に鬼の念仏を連想するという俳諧が出るほど、画題が定着していた。

このような勸進僧に扮する〈鬼の念仏〉の由来は明らかではない。大津百町周辺で勸進活動をする念仏僧や、鬼面を着けて市井で門付けをする芸能民を戯画的に描写したのではないかと説もある^①。しかし、江戸以前には、絵画における作例は見受けられないので、実在した芸能民にヒントを得たとしても、大津絵師が創案した画

題なのであろう。

『西鶴織留世の人心』(元禄七年(一六九四))には、「あたまを剃墨衣ちりぞく着て形は出家になれども、中々内心は皆鬼にころもなり。鉦たゝきて念佛申てそればかりにてすむ世の中にはあらず」とある。また、諺を種にする喃本『絵姿 やぶにまぐわ』(享保三年(一七二八))には、「鬼にころも」の挿絵があることから、〈鬼の念仏〉は、十七世紀末から譬喩として用いられていたものである。江戸後期の諺事典、太田全齋編『諺苑』(寛政九年(一七九七))にも「鬼二衣」が登場している。さらに、改編増補『俚言集覧』(文政十二年(一八二九)以前)には、「鬼の念佛」という項目が新たに加えられ、「鬼のそら念佛とも云(中略)。大津繪のざれ繪にあり。大津畫の鬼の念佛の畫は小兒の夜泣のまじなひ也、所持して張置べし」との解説がある。ここで言う空念仏そらねんぶつとは、信心が定まることなく、ただ口に唱える念仏のことである。したがって、〈鬼の念仏〉もしくは〈鬼に衣〉は、諺を踏まえて大津絵に登場したのであろう。因みに、それ以外にも、多くの大津絵の画題が諺から生まれている^②。

また、〈鬼の念仏〉は、中国の警句集『李義山雜纂』



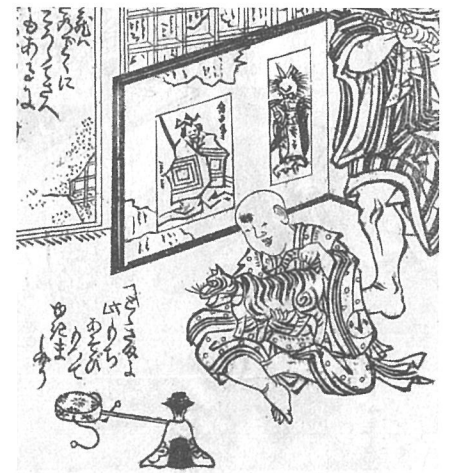
挿図8 河鍋狂齋『鬼の念仏』錦絵
明治10年(1877) (河鍋暁斎記念美術館蔵)

我が家、世々浄土念佛怠らず毎に此図を見て戒むべきことなり。

于時天保庚子正月五日 等閑齋「花押」

等閑齋については、『画乗要略』(天保二年(一八一三))に、谷等閑齋という狩野派系の新潟の絵師の項目があるが、同一人物かどうかは不明である。いずれにしてもこの賛は、天保十一年(一八四〇)頃の人々にとつての(鬼の念仏)の意味解釈や、用途を示す貴重な例である。ここで(鬼の念仏)の寓意は、「寧ろ、身や心裏ヲ装ハズ、正直タルヲ偏ニ望ム所ナリヤ」という六言聯で表現されている。この「正直」の徳を説く教訓は、仏教を批判する近世の儒学書、あるいは心学書から引用されているようだが、典拠は見当たらない。重要なポイントは、この浄土宗・真宗の家では、鬼の念仏が代々受け継がれ、本尊の脇に掛けられ、念仏精進を自らに問う「お像」として祀られていたことである。大津絵は、「大津絵に廻向してゆく鉢たき」(『俳諧日本国』元禄十六年(一七〇三))とあるように、元々は庶民の祈願礼拝の対象であった。そして、浄土真宗の家庭で、大津絵の阿弥陀如来を御内仏(仏壇)の本尊にする例は、真宗佛光寺派の学僧・信

巻子の經典を収納した笈を背負い、錫杖と鉦を鳴らしながら家々を廻り、喜捨を求めた「六十六部」という巡礼者であるが、それを禪姿の鬼に変えて諷刺した諧謔的な絵である。二つの文献がこの画題の意味を示唆してくれる。まず、『人倫訓蒙図彙』(元禄三年(一六九〇))では、西国三十三所観音を廻つて勧進する「似瀬巡礼」が紹介され、「後世が恐ろしい」と警告している。そして、江戸の風俗史誌『守貞謾稿』(嘉永六年(一八五三)成立)には、「西国巡礼及六部ニハ実ニ参詣ノ者アリ。或ハ三都



挿図7 山東京伝作、初代歌川豊国画
『岩井櫛条野仇討』文化5年(1808)
(国立国会図書館蔵)

曉の『山海里』(五編上「佛法の本意」、天保十四年(一八四三))にもあるが、等閑齋の墨書によつて、(鬼の念仏)も訓戒本尊の役割を果たしていたことが初めて裏付けられた。(鬼の念仏)のプロトタイプとして、同じ意味合いを込めた(鬼の廻国)という画題がある。人氣がなかったのか、残念ながら作例は現存しないが、絵俳書『大津追和氣』(宝永六年(一七〇九))挿図5)に登場しているので、初期大津絵には存在していたはずである。その元となるのは、全国六十六の寺社に法華經を納めるために、

共乞巧人は二扮シテ出ル者甚多シ」との記述があるので、偽巡礼者を大津絵師が取り上げたのであろう。

この(鬼の廻国)を、(鬼の念仏)と合体させたような江戸後期の珍しい木彫二軀を、パリのデナリー美術館の所蔵品中に確認し、昨年、パリ日本文化会館において、大津市歴史博物館の協力により、企画した大津絵展で展示した(挿図6)。縦三十四厘あるこの迫力に満ちた置物は、おそらく仏師に発注され、大津絵店の店先に置く看板用に作られたのであろう。ちなみに、日本では同じような作例として、大津市歴史博物館の所蔵品のみが確認されている。

浄瑠璃『ひらかな盛衰記』(元文四年(一七三九))に、泣く子供に大津絵を与える例が既に認められるが、江戸後期になると、(鬼の念仏)は偽善をなす人への諷刺から、もつぱら護符や、疫病除けなどという新たな役目を担うことになる。例えば、山東京伝の合巻『岩井櫛条野仇討』(文化五年(一八〇八))に、子供の寝床に、團十郎を描いた役者絵と、鬼の念仏図が貼られた枕屏風が置かれている場面(挿図7)があり、大津絵がいかに庶民の日常生活の中に浸透していたかが窺える。(鬼の念仏)

は色々なご利益があると信じられていたのである。幕末・明治頃になると、四つ切り大の大津絵十枚一組が袋入りで売られていたが、付属する能書には、それぞれの画題の効験が説明されている。〈鬼の念仏〉は「邪魅掃攘之符并にみどり子の夜なきを止」と記され、護符とされていた（名産 諸咒感得 大津画 正本家 大津驛四之宮鳥居前 万亭又平製 筆者架蔵）。

また江戸末期から、歌川国貞、歌川芳艶、隅田了古などの浮世絵師も、〈鬼の念仏〉を錦絵に描き、詞書にその効能を説いている。例えば、自らを「画鬼」と称していた河鍋狂斎の『鬼の念仏』（挿図8）には、「此鬼の念仏は小児の夜泣を止め喪を除くるの咒にして家内に張おく時は疫癘を防ぎ災難を免るゝと古く都鄙に言傳て其功顯然たり」と、記されている。

お守りとしての大津絵の使用は、二〇世紀に入ってもなお続いていたが、そのご利益を得るために、〈鬼の念仏〉を上下逆さにして貼る風習もあつたようだ。例えば、版画家の旭正秀（一九〇〇～一九五六）は明治末の子供

時代の思い出を次のように語っている。

「私は五つ六つの頃まで、夜なきがはげしかつたので、その頃母がよく、大津繪の「鬼の念佛圖」をさかさに襖へ張つて置いたことを覚えてゐる。これは昔かた氣な私の母がこの「鬼の念佛圖」が小兒の夜泣きを止めるまじないになるといふ傳説的な迷信からしたこと、私にとつて大津繪は、随分古い知己でもある。」

さらに、洋画家の麻生三郎（一九一三～二〇〇〇）が所有していた大津絵〈鬼の念仏〉の箱書きに、「夜泣き等によく効くという《鬼の念仏》を近所の人に貸したところ、効果があつたのでお礼をいただいた」との記録がある⁶⁾。つまり、迷信を排除しようとした近代社会の中でも、〈鬼の念仏〉は現役の呪い^{まじな}として役割を務めていたのである。昨今のコロナウイルス流行で、江戸末期の病魔除けの妖怪「アマビエ」や「ヨゲンノトリ」のように、〈鬼の念仏〉も現役に復活してほしいものだ。

（クリストフ・マルケ、フランス国立極東学院教授・学院長）

註

- (1) 鈴木堅弘「大津絵と芸能民の位相——「鬼の念仏」・「藤娘」の画題を中心に——」『藝能史研究』二百三十号 令和二年七月
- (2) 仲田勝之助は、少なくとも十四件の大津絵画題が『毛吹草』（正保二年（一六四五）所収の諺を描いていると指摘（『大津絵と諺』『汎究美術』五十一号 昭和十六年十二月）。
- (3) 『東洋絵画叢誌』（第五集 明治十八年二月）に大津絵の「夜叉念佛」の解説に「心裏邪曲にして念佛三昧する人を刺撃する所の寓意にして表面には殊勝の形容を裝飾するも心意邪惡なれば神佛何ぞ之を加護せむ寧ろ身を墨染に裝飾せずとも心裏正直ならむことを望むと云諷意なり」とあり、同じ出典である。
- (4) Christophe Marquet (dir.), *Otsu-e : peintures populaires du Japon*, Paris, MCJP/EFPO, 2019. 横谷賢一郎「フランス国立ギメ東洋美術館附属デマリ美術館所蔵木造鬼念仏立像および大津絵根付・置物」『大津絵——ヨーロッパの視点——』展冊子 大津市歴史博物館 令和元年
- (5) 旭正秀『大津絵』内外社 昭和七年 三頁
- (6) 麻生マユ「麻生三郎コレクションに寄せて——私の視点から」『麻生三郎とそのコレクション』展図録、神奈川県立近代美術館鎌倉 平成二十一年 十四頁

編集後記

今回、フランス人の日本美術史研究者、クリストフ・マルケ先生に大津絵の論考をご執筆いただきました。大津絵は日本国内だけではなく世界的に人気が出てきております。江戸時代の初期に民俗絵画として世に出てきましたが、今ではその素直な絵が人々の心を掴んでいます。丹波焼にも通じますが、民衆の道具や信仰の対象として生まれたものが鑑賞美術へと変わり得たのは、昔の人々の精神が非常に純粋で素朴なものだったからだと感じています。その純粋さが現代人の心に響くのではないのでしょうか。

現在、千代田区にあります東京ステーションギャラリーにて「もうひとつの江戸絵画 大津絵」展が十一月八日まで開催されています。この展覧会開催の契機となったのは、文化勲章を受けた洋画家、小糸源太郎秘蔵の大津絵がまとめて収蔵された、笠間日動美術館のコレクションの存在で、今回が日本初公開ということ。この機会に大津絵の奥深い世界にぜひお触れいただきたく、ここにお薦めいたします。丹波古陶館学芸員／藝術文化雑誌「紫明」編集部 中西 遼

一陽來復、そのような気もちをこめて、特集を「鬼」といたしました。鬼とひととの長く深い関わりをさまざまな見地から論じていただき、本誌もまた素晴らしいものとなりました。詩は千家元麿の最初の詩集に取められた一篇で、彼の特徴のひとつである自然への賛美が感じられます。大正七年に上梓されたこの瑞々しい詩集は、友人の岸田劉生が装丁を手がけ、元麿の敬愛する武者小路実篤が激賞の言葉にあふれた序文を書いており、まさに友愛につつまれた作品といえるでしょう。本誌へのご寄稿を執筆者の方々にお願いたしましたのは、初夏のころでした。常ならぬ時にも関わらずご快諾賜りました皆様方に、この場を借りまして心より厚く御礼申し上げます。

藝術文化雑誌「紫明」編集部 服部 規子

もう一度お出合いしたい方があります。昨年ご逝去されたドイツ文学者の池内紀先生です。先生には「紫明」第二十六号「美の随想」、第三十六号「特集ベルリン」にご執筆いただきました。平成二十二年の夏、丹波古陶館のミュージアムショップに、静かな姿でお座りになられていた先生を見つけました。「丹波地方の農業関係者に、親戚の方がおりましたね。訪ねてら、古陶館に立ち寄りまして」とのこと。名のらずに、そのまま帰られるところだったよう、「わかりましたか」とにっこりされた。「風のような旅人」とご友人から呼ばれたように、縁をたどり、思案されながら文化と人との文章に刻まれてきた方なのだなあと思ったり。地方からの文化発信を続ける本誌編集部に力を与えていただいた池内先生。心から「ありがとうございました」と申し上げたいのです。

藝術文化雑誌「紫明」発行人兼編集人 中西 薫

友の会 紫明の会

会員を募集します

丹波篠山は、近畿・京阪神の奥座敷。中世からの歴史に彩られた美しい城下町です。平成九年（一九九七）この自然と文化豊かな町から全国に向けて、質の高い芸術・文化の情報を発信しようとの機運が高まり、それぞれの専門分野で著名な先生方の寄稿を仰ぎつつ、藝術文化雑誌「紫明」を創刊することができました。さらに、この雑誌の「継続的な発刊のパワー維持の基盤を確立するべし」とのご期待に応え、あわせて丹波古陶館／篠山能楽資料館の活動へのご理解を深めていただくべく、創刊誌発刊と時を同じくして、両館友の会「紫明の会」を創立いたしました。

幸いに、全国の芸術愛好の皆様の幅広いご賛同が得られ、現在では多くの会員を擁する組織に発展しております。また「紫明」誌も號を重ね、質の高いユニークな雑誌と評されております。

皆様方におかれましては、藝術文化雑誌「紫明」および「紫明の会」の一層の発展に対し寄与を賜りたく、新規会員としてお申し込みをいただきますよう、ここにご案内申し上げます。

■丹波古陶館

丹波古陶館は昭和四四年（一九六九）に設立。妻入りの商家群が江戸時代そのままの姿で立ち並ぶ、丹波篠山河原町の一角にあります。展示室は生糸蔵・米蔵として使われた古建築です。ここでは、丹波焼の創成期から江戸時代末期に造られた代表的な品々を分類展示しています。また、館蔵の「古丹波コレクション三一・二点」は兵庫県文化財に指定されています。

[URL] <http://www.tanbakotoukan.jp>

■篠山能楽資料館

篠山能楽資料館は昭和五一年（一九七六）に設立。いにしへの丹波猿樂と、近世の城下町文化が育んだ風土の中で、能面・装束・楽器など能に関する資料の収集と研究を行い、常設で公開しています。能楽専門の資料館として日本における伝統芸能の一拠点となっています。春秋に展示公開しています。

[URL] <http://www.nohgakushiryokan.jp>



丹波古陶館／篠山能楽資料館がある「河原町妻入商家群」

国重要伝統的建造物群保存地区

藝術文化雑誌
紫明／第四十七號
2020年10月20日 発行

発行所 紫明の会
丹波古陶館・篠山能楽資料館友の会
発行人兼編集人 中西 薫
編集部 服部規子 中西 遼
兵庫県丹波篠山市河原町185 丹波古陶館内
電話 079-552-2524 FAX 079-552-5718
「紫明の会」事務局 児玉奈緒
兵庫県丹波篠山市河原町175 篠山能楽資料館内
電話 079-552-3513
印刷所 藤本印刷株式会社

紫明の会に入会いただきますと

- ◆藝術文化雑誌「紫明」を春秋二回無料でご送付させていただきます。
- ◆会員証により丹波古陶館／篠山能楽資料館のご案内は、同伴者一名様までフリーパス。両館特別展、常設展ともに無料です。
- ◆「紫明の会」が主催する芸術文化研修の旅や講演会、鑑賞会のご案内をいたします。この会には優先してご参加いただけます。
- ◆丹波古陶館／篠山能楽資料館が主催する展覧会及び主催行事のご案内、情報提供をいたします。
- ◆両館のミュージアムショップを、一〇%の割引にてご利用いただけます（ただし書籍は館発行のもののみ）。

「紫明の会」の会費は、年額三、〇〇〇円です。

入会お申込み方法

- ①左記事務局へお電話下さい。入会申込み書を送りいたします。
- ②入会申込み書が事務局へ届きましたら会員証を発行、友の会規約と共に送付します。
- ③会員証に郵便振替用紙を同封いたしますので、最寄の郵便局から会費をご納入下さい。

お問合せ・お申込み先

丹波古陶館／篠山能楽資料館友の会

紫明の会事務局

T0699-2325 兵庫県丹波篠山市河原町175
TEL079-552-3513
FAX079-552-5718